住民交流の促進と安心・活気の地域づくり
高齢化すすむ過疎地の福祉のあり方を体現

北海道の元気！NPO訪問

40 NPO法人 ふれあいインさろま

文・加藤知美

◇ 交通の要所に立つ交流拠点「街の駅わかさ」

オホーツク地域のほぼ真ん中に位置する佐呂間町若佐を訪ねた。札幌から北見へ車で向かうルートは、旭川紋別自動車道などの整備により格段に時間短縮された。その途上、遠軽方面から佐呂間町への入り口に位置するのが若佐地区。二〇〇六年一一月、大規模な竜巻災害により九名が亡くなるなどの甚大な被害が出た場所だ。

この地区に、一〇年以上前から活動を続ける「NPO法人ふれあいインさろま」がある。空き家となっていた食堂兼住宅を改装して三年前にオープンした「街の駅わかさ」は、その活動拠点のひとつだ。旭川、北見、留辺蘂などを結ぶ交通の要所である佐呂間町若佐地区の中心近くの交通量の多い国道沿いに立地している。店内には、通りがかりのドライバーや旅行者もよく利用する食堂と地域の特産品を販売するコーナーがある。地域住民も気軽に立ち寄れるこの店では、「かぼちゃ蒸しパン」や「ふっくらまん」といったオリジナルの看板商品も人気だ。

◇ 住民ニーズに寄り添い、福祉と地域活性化に尽力

「NPO法人ふれあいインさろま」は、高齢化がすすむ地域で古き良き時代の「お茶の間」を再現するような憩いの場をつくろうと二〇〇一年に設立された。中心となったのは、僧籍を持つ藪香寿枝理事長だった。寺院が医療や福祉と連携して、がんなどの病気などに悩む人たちの苦痛を和らげ支援するビハーラ活動を通じて、地域住民同士助け合いながら高齢者自身が温もりある生活を送れるようにしたいという思いが膨らんだ。藪さんは、志を同じくする仲間が集まれば実現すると考え、地域の活性化と福祉の向上をめざすNPO法人を設立した。

活動のスタートは、お寺で地域交流の場となるサロンとして「茶の間」を運営することだった。若佐地区は、人口は約七〇〇人だが、畑作と酪農がさかんで、住民同士の絆は固いほうだという。それでも、子どもが独立して都会に出て行ったために寂しい思いをしている高齢者も多く、またたく間に交流の輪は広がっていった。「茶の間」では、押し花や江戸凧づくりなど趣味を活かした生き甲斐づくりの活動を活発化させた。

そうしたなか、地域の高齢者の多くが通院に不便な思いをしていることを解決すべく、移送サービスを開始した。北見の病院まで約五〇キロの道のりを、バスを乗り継いで半日がかりでたどりつくというのが普通だった。移送サービスを始めてからは、朝七時頃から平均一日三往復して通院を支援した。

国道333号線沿いに立地する「街の駅わかさ」。左側は隣接する安心ハウス「のどかⅡ」。

その後、訪問介護事業を立ち上げ、二〇〇五年に高齢者、障害者が住み慣れた地域で安心して暮らせる宅老所、安心ハウス「のどか」を開設した。

二〇〇九年には、高齢者などの住居と地域交流スペースを併設して展開する安心ハウス「のどかⅡ」・「街の駅わかさ」を開設した。改修費用の三〇〇〇万円に活用したのは、厚生労働省の地域介護・福祉空間交付金だ。この助成金は、地域再生の観点などを踏まえ、国民が住み慣れた地域で暮らし続けることができるようにするため、各地方公共団体が地域の実情に合わせて予防から介護に至るまでのサービス基盤を整備することを支援するというもの。オホーツク管内ではNPO法人を中心によく活用され、七件目の適用だった。二階建ての木造で、延床面積二七〇平方㍍の四分の三のスペースを宅老所とした。介護保険や障害者支援制度にとらわれない住宅として六室を確保している。

安心ハウス「のどか」。法人本部からは歩いてすぐの距離にある。

「街の駅わかさ」では、地元の農水産物加工品などを販売しているが、独自に商品開発を試みた。「ふっくらまん」はかぼちゃ味の皮のおまんじゅうで、中のあんは三種類。地域の冠婚葬祭で出されるおまんじゅうをヒントに、特産のかぼちゃのパウダーを使用してふっくらした手作りの味わいをめざした。さらに、「かぼちゃ蒸しパン」も開発し、各地の物産展でも販売して好評を得ている。このほか、地域交流の場として、フリーマーケットやビアパーティーを開催して、地域住民が気軽に集まれるよう工夫をしている。

活動開始当初の「茶の間」での文化教室は、現在は法人本部事務所棟の一角で活発に行われている。広大な畑が目の前に広がる「教室」は、窓の外を眺めるだけでも癒される。押し花、パソコン、カラオケ、書道などの授業が定期的に開かれ、幅広い世代の参加がある。地域のお祭りや展覧会で発表の場があることが楽しみでもあり張り合いを生む。年をとっても意欲をもち、いきいきと学ぶ姿は、スタッフにとっても励みとなる。

◇ 住民相互の助け合いが地域活性化の原動力に

このような多様な活動を支える職員は、現在二一名。「たくさんの人に応援してもらってここまでこられた」と理事長の藪さん。助成金や金品の寄附にも力をもらっている。

また、若佐地区は地域内の結束力があり、お祭りや盆踊りも盛大に行われる気風があり、宅老所の高齢者の自宅を解体することになったときも、近所に相談したら快く作業を引き受けてくれたそうだ。住民相互の関わりが薄くなりつつあるこの時代に、地域内交流の拠点があることによって、お互いが助け合いながら地域を活性化する仕掛けとなっているようだ。

週１回のパソコン教室では、写真を取り込んでの年賀状作成などにも挑戦。

藪さんは、「明確なメッセージをしっかり発信していれば、どんな場所であれ思いを実現できることを実感した」という。さらに、NPOという方法を選択することにより、共通の思いをもつ人と人がつながり、活動が花開いたと振り返る。過疎や高齢化がすすむ地域での福祉のあり方を提示しているのではないだろうか。

◆ NPO法人ふれあいインさろま
所在地　常呂郡佐呂間町字若佐41番地の3
TEL　01587-2-8438
WEB　http://blog.canpan.info/fureaiinsaroma/